氏名	大平　倍大
ヨミガナ	オオヒラ　マスヒロ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第361号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉　ロベルト・シューマン《N. レーナウの6つの詩とレクイエム》作品90 —連作歌曲としての研究と演奏考察—
	〈演奏〉　Robert Schumann：Myrthen op.25 他
論文等審査委員	
（主査）	東京藝術大学　教授　（音楽研究科）　吉田　浩之
（副査）	東京藝術大学　教授　（音楽研究科）　佐々木　典子
（副査）	東京藝術大学　准教授　（音楽研究科）　萩原　潤
（副査）	東京藝術大学　名誉教授　檜山　哲彦

（論文内容の要旨）

本論文はロベルト・シューマン《N. レーナウの６つの詩とレクイエムSechs Gedichte von N. Lenau und Requiem》作品90の連作性を明らかにし、連作歌曲としてどのように演奏すべきかを考察することを目的とする。作品90は、1850年に出版された７曲からなる歌曲集である。１～６番はレーナウの詩、７番はエロイーズがラテン語で書いた Requiescat a laboreをレーベレヒト・ドレーヴェスが「レクイエムRequiem」としてドイツ語翻訳したものが使用されている。作品90を全曲通して演奏すると、随所に明らかな連作性が感じられる。しかし、実際に全曲演奏される機会はほとんどなく、数曲が単独で演奏されるのみである。そもそも、作品90は連作歌曲として認知されていない。これは、作品90に連作歌曲を表す言葉や、連作歌曲としての独自のタイトルがついていないことが原因と考えられる。しかし、これらの言葉やタイトルは主に商業的観点から誕生したのである。つまり連作歌曲を表す名称が付いていなくても、作曲家自身は連作の意識を持って書いた可能性があるのだ。そして、それを裏付けるようにシューマンは手紙の中で作品90を「連作歌曲」と記している。本論文では、詳細な分析によって作品90の持つ連作性を明らかにし、連作歌曲としてどのように演奏すべきか、演奏家の視点から考察する。

第１章では、作品90の背景を明らかにし、各曲を独立した歌曲として詩的観点と音楽的観点から分析する。詩的観点では、形式分析と内容分析を通して、詩の持つリズムやテーマ、物語の特徴が明らかになった。音楽的観点では、それぞれの歌曲が持つ音楽的特徴を明らかにした。また必要に応じて、歌唱の際にどのような工夫の可能性があるかについて言及した。

第２章では、各曲分析で蓄積した情報をもとに作品90の連作性を明らかにする。まず詩的観点において、シューマンが選択したレーナウの６つの詩とエロイーズの「レクイエム」、そしてシューマンが配列したその順序によって「さすらい」と「愛」のテーマを持った一つの物語が生まれた。その物語の「主人公」は、「世界苦」を創作のテーマにし、「死への救済」を望み続けた詩人ニコラウス・レーナウに投影された。“Stern”と“Himmel”というモチーフによって第１曲と終曲が結ばれ、個々の詩は様々なモチーフやテーマで密接につながっている。また音楽的観点においては、「形式」、「調性」、「テンポ」、「モチーフ」という４つの点で、個々の歌曲に明確な連作性を確認できた。「形式」はその配列が環を成し、連作歌曲を形作っている。「調性」は個々の歌曲の移り変わりを意識した流れになっており、それぞれの歌曲が前後と密接につながっている。また「形式」と同じように、「調性」の配列は４番を中心に対称的な形を作り、Es-Durで第１曲と終曲を結ぶことで、強い連作性を生み出す。「テンポ」は、明らかな統一性が目立った。１，２，４，５，６番には均一的テンポが設定され、３，７番は前後の歌曲と強い関係性のもとテンポが設定されている。「モチーフ」においては、ピアノパートの「下降系のモチーフ」と声楽パートの「ため息き

のモチーフ」をはじめ、掛留音やその他の様々なモチーフによって作品90の連作性が強調されている。以上のことから、作品90の連作性が証明され、作品90が連作歌曲として作られた作品であるということが明らかになった。

演奏考察については、連作歌曲の演奏の際に重要となる「曲間」、作品90において重要な「テンポ」設定、「モチーフ」の３点に重点を置いて考察を重ねた。「曲間」では、作品90という一つの物語で生じる「蹄鉄工」、「主人公」、「弔う者」という３つ登場人物の視点の切り替えが重要となる。１番から２番で「蹄鉄工」から「主人公」へ、６番から７番で「主人公」から「弔う者」へと視点が切り替わる。この２箇所の「曲間」では、その準備としての時間が必要である。一方、２番から６番までは一人の「主人公」が語る場面であり、個々の歌曲のつながりが非常に強く現れる。この５曲は「曲間」を意図的に空けることなく、スムーズな流れで演奏すべきである。「テンポ」に関しては、前後の歌曲との関係性を意識した「テンポ」設定が重要である。そして「モチーフ」を意識した演奏を目指すことで、個々の歌曲に見られる様々な「モチーフ」が複雑に絡み合い、それらが７番〈レクイエム〉に向かっていることが分かった。〈レクイエム〉ではこれまでのモチーフが随所に現れ、声楽パートの最後のフレーズから後奏にかけて、ピアノパートと声楽パートが見事に融合されている。そして１番〈蹄鉄工の歌〉と同じ調性で終止することによって、７曲からなる環が生まれ、作品90という連作歌曲が完成する。

本論文を通して作品90の連作性が明らかになり、作品90が連作歌曲として作曲されたということが証明された。レーナウとエロイーズの詩によって語られる物語が、様々な要素によって強いつながりを持ち、連作歌曲として見事に完成されている。また、連作歌曲としての演奏における重要な点を考察することができた。これは作品90に限らず、その他の連作歌曲にも共通するだろう。本論文を機に作品90が連作歌曲として認知され、全曲演奏が増えることを強く願う。

（総合審査結果の要旨）

演奏は、シューマンの歌曲の中から、前半は「ミルテの花」から抜粋、後半は「N.レーナウによる６つの詩とレクイエム」などのプログラムであった。非常にレベルの高い演奏で、最初は緊張による硬さも少し見られたが、ドイツ語のテキストを深く読み込み、詩を語るという姿勢に徹底していたのが良い演奏に繋がった。繊細な弱声を効果的に使い、テノール特有の熱く歌い上げる部分との対比により非常に幅のあるダイナミックな表現に成功していた。特に「レーナウの詩による歌曲」は論文研究が十分にいかされた深みのある演奏であった。最後のレクイエムの解釈においてのみ、委員の先生方から疑問の声があった。他の６曲とは詩人も違い、全く異なる音楽として捉えるべきところを、若さゆえなのか、連作性を強調するあまりか、６曲の延長線上に歌い上げてしまっており、今後に期待されるところも残した。しかしながら、全体的には、よく構成されたプログラムで、第一回、第二回の博士リサイタルの経験を活かした秀逸な演奏であった。また、今回の演奏はドイツ歌曲の演奏では第一人者といえる素晴らしいピアニストの丸山滋先生との共演となった。その、歌い手をしっかりと支え、歌い手と繊細に語り合いながら作り上げる姿勢は特筆すべきものであった。この共演により非常に格調高いドイツ歌曲の演奏となった。

論文は、ロベルト・シューマン《N.レーナウによる６つの詩とレクイエム》作品90　―連作歌曲としての研究と演奏考察―　という題目である。この曲集は作曲者自身によって連作とはっきり名付けられていないにもかかわらず、連作歌曲としての性格を備えていることを分析研究し、その研究成果に基づいて、当該曲集を一個の「連作歌曲」として演奏するために何が必要かを考察しようとするものである。第一章では、詩と楽曲の両方をしっかりと分析しているが、詩の分析に関して、言語が生み出す音響・音楽面へも視野が広がっていれば、実際の演奏に関わる考察がさらに深まったと思われる。また残念ながら、各曲の分析において筆者の思い込みが強いところがあり、こうあって欲しいという思いだけで理由を述べるにとどまっている部分も見られたとの指摘もあったのは残念である。第一章での分析から得られた成果が「連作」という主題のもとに統合される第二章では、文学面にあっては、全体が「さすらい、愛」の主題を持つ物語と読み解かれ、音楽面にあっては、「形式、調性、テンポ、モチーフ」という要素それぞれ

において、全体的な連関が存在することが論じられ、当該曲集において立体的で連作的性格を賦与していることが明らかにされている。最後の第三章においては、第二章での分析と統合を前提としつつ、さらに曲から曲への受け渡しという視点にも重心を置きつつ、演奏における実践の考察がなされているのは非常に好感の持てるものであった。

以上のことを鑑み、当審査会において、演奏、論文を総合的にみて、学位に充分相応しいものと判断する。